

令和 7 年度病害虫発生予報 第 3 号（6 月予報）

令和 7 年 5 月 2 8 日
青森県病害虫防除所

【概 要】

水 稲：イネミズゾウムシ、イネドロオイムシは平年並と予想される。

小 麦：赤かび病はやや多い、うどんこ病、赤さび病は平年並と予想される。

り ん ご：モニリア病、黒星病は平年並、斑点落葉病は少ないと予想される。キンモンホソガ、モモシンクイガは平年並、クワコナカイガラムシは少ないと予想される。

特産果樹：ぶどうの灰色かび病はやや少ないと予想される。

おうとうの灰星病はやや少ないと予想される。

野 菜：じゃがいもの疫病は平年並と予想される。

にんにくの春腐病は多い、さび病はやや多い、葉枯病は平年並と予想される。

キャベツ、ブロッコリーのコナガは多い、ヨトウガはやや少ないと予想される。

1 予報内容

(1) 水 稲

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
イネミズゾウムシ	県内全域	早い (成虫侵入 盛期)	平年並	① 4～5月の気温は平年より高く推移しており、成虫侵入盛期は平年より早まると予想される。 ②前年の発生量は平年並であった(±)。
イネドロオイムシ	県内全域	早い (産卵・ふ 化盛期)	平年並	① 4～5月の気温は平年より高く推移しており、産卵・ふ化盛期が平年より早まると予想される。 ②前年の発生量は平年並であった(±)。

(2) 小 麦

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
赤かび病	県内全域	遅い	やや多い	①開花期は平年より遅い見込みである。 ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(+).
うどんこ病	県内全域	—	平年並	①5月中旬の発生量は平年よりやや多い(+). ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(—).
赤さび病	県内全域	—	平年並	①5月中旬の発生量は平年並(±)である。 ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(±).

(3) りんご

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病 (実腐れ)	県内全域	—	平年並	①葉腐れ・花腐れの発生量は平年並である(±)。
黒星病	県内全域	—	平年並	①5月の発生量は平年並(±)である。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
斑点落葉病	県内全域	平年並	少ない	①向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ②前年の発生量は平年より少なかった(－)。
キンモンホソガ	県内全域	やや早い	平年並	①4～5月の気温は平年よりやや高く推移し、向こう1か月の気温は津軽地域で平年より高いと予想される。 ②前年秋の発生量は平年並であった(±)。
クワコナカイガラ ムシ	県内全域	—	少ない	①越冬卵量は平年より少ない(－)。
モモシンクイガ	県内全域	—	平年並	①前年の発生量は平年並であった(+)。

(4) 特産果樹

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(ぶどう) 灰色かび病	県内全域	平年並	やや少ない	①向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ②前年の発生量は平年よりやや少なかった(－)。
(おうとう) 灰星病 (実腐れ)	県内全域	平年並	やや少ない	①おうとうの落花日は平年並である。 ②向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ③前年の発生量は平年よりやや少なかった(－)。

(5) 野 菜

病 害 虫 名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(じゃがいも) 疫病	県南地域	—	平年並	①向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(±)。
(にんにく) 春腐病	県内全域	—	多い	①5月中旬の発生量はやや多い(+) ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(+)
(にんにく) さび病	県内全域	—	やや多い	①5月中旬の発生量は平年並である(±) ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(+)
(にんにく) 葉枯病	県内全域	—	平年並	①5月中旬の発生量はやや少ない(－) ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(+)
(キャベツ) コナガ	県南地域	—	多い	①フェロモントラップの誘殺数は平年より多い(+) ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(+)
(キャベツ) ヨトウガ	県南地域	—	やや少ない	①フェロモントラップの誘殺数は平年より少ない(－) ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(+)
(ブロッコリー) コナガ	津軽地域	—	多い	①5月中旬の発生量はやや多い(+) ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(+)
(ブロッコリー) ヨトウガ	津軽地域	—	やや少ない	①5月中旬の発生量は少ない(－) ②向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想される(+)

※ 予報の根拠内の気象情報は、5月22日発表の1か月予報による。

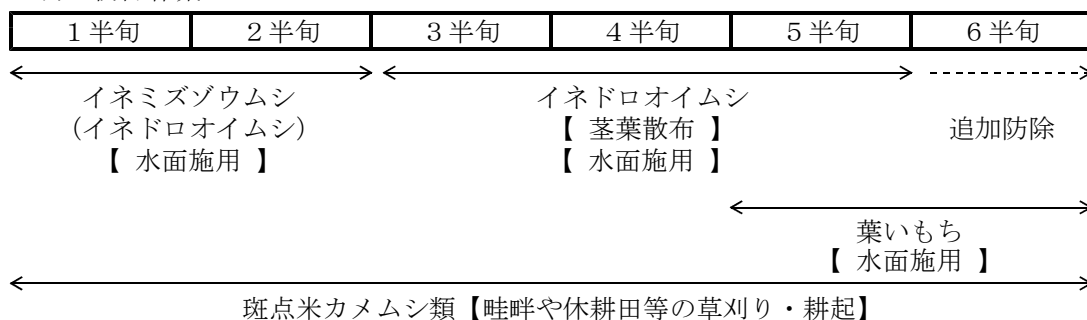
発生量に対し、(+)：多くなる要因、(－)：少くなる要因、(±)：多少に大きく影響しない要因

2 防除のポイント

薬剤名の後に記載している括弧内の数字・記号は、有効成分の作用機構分類RACコードを示す。なお、混合剤等、複数の有効成分を含む剤はコードをカンマで区切って併記した。FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン（旧農薬工業会）ホームページ（<http://www.jcpa.or.jp/lab0/mechanism.html>）を参照。

(1) 水 稲

《 6 月の防除作業 》



注: ←→ は防除時期
 () 内は同時防除できる害虫
 【 】内は防除方法
 防除薬剤は県農作物病害虫防除指針等を参照するか、指導機関に問い合わせる。

【 葉いもち 】

- ① 補植用の取置苗は放置すると葉いもちの発生源になるので、補植作業が終わり次第処分する。
- ② 葉いもちが例年発生する水田で箱施用剤又は側条施用剤による防除を行っていない場合は、6月20日前後～6月末までに水面施用剤を予防散布する。
- ③ 葉いもちの初発生は6月末から7月中旬に確認されるので、ほ場をよく観察し、病斑が見つかり次第初期防除を徹底する。

【薬剤耐性いもち病菌への対策】

Q o I 剤耐性菌が東北地域でも確認されている。

本県における耐性菌の発生を未然に防ぐため、地域一体となって以下の対策を実施すること。

ア Q o I 剤は1年ごとに作用機構の異なる薬剤とローテーションで使用するとともに、育苗期から本田期を通じて年1回以内の使用に止める。

- ① これらの成分を含む本田散布剤は、多発時の使用を避ける。
- ② オリブライト剤 (F:11)、アミスター剤 (F:11) は同一系統剤とみなす。

イ 種子流通に伴い耐性菌が広範囲に伝播することがあるため、採種は及びその周辺ではこれらの成分を含む薬剤は使用しない。

ウ 自家採種は耐性菌発達の原因となるので、種子更新、塩水選及び種子消毒を行う。購入種子 (他県産稲、飼料用稲を含む) でも必ず種子消毒を行う。

エ Q o I 剤を使用した水田において、いもち病 (葉いもち、穂いもち) が多発生した場合には、罹病葉 (穂) を採取し、病害虫防除所又は関係指導機関に連絡するとともに、他系統薬剤で追加防除を行う。

【 イネミズゾウムシ 】

移植時の防除を実施しなかった水田では、6月1～2半旬に食害株率が82%を超えた場合に、水面施用剤による本田防除を行う。なお、食害調査は、畦畔から中央に向かって2mぐらい入った地点から1筆当たり2か所について計50株以上を調査する。

【 イネドロオイムシ 】

- ① 箱施用剤等を使用した水田や5月下旬～6月上旬にイネミズゾウムシを対象とした水面施用剤を処理した水田では、本虫の防除は不要である。ただし、発生が遅れ、6月下旬に食害が多くなるような場合は、追加防除が必要になる。
- ② 箱施用剤等による防除やイネミズゾウムシの防除を実施しなかった水田では、ふ化盛期 (本田での幼虫被害発生初期) に防除する。
- ③ 低温や曇天の日が続くと産卵期間が長引き、防除適期を逸しやすい。また、幼虫の食害活動にも好適となるため、被害が大きくなる可能性がある。発生状況を観察して防除適期を逃さないようにする。

【 イネヒメハモグリバエ 】

- ① 成虫は水面に垂れている葉や浮き葉に産卵する。産卵に適した葉が多いと被害を助長する傾向があるため注意する。
- ② 水田内をよく観察し、被害が見られたら茎葉散布剤を散布する。ただし、本虫に登録のある箱施用剤を使用した場合には追加防除は不要である。

【 斑点米カメムシ類 】

- ① 発生源となる水田周辺の休耕田や畦畔等では、イネ科雑草が開花・結実しないように刈取りや耕起を行う。
- ② ノビエ、ホタルイ、シズイ等を多発させないように雑草防除を徹底する。

★農薬散布後の「止水期間は7日間」です★

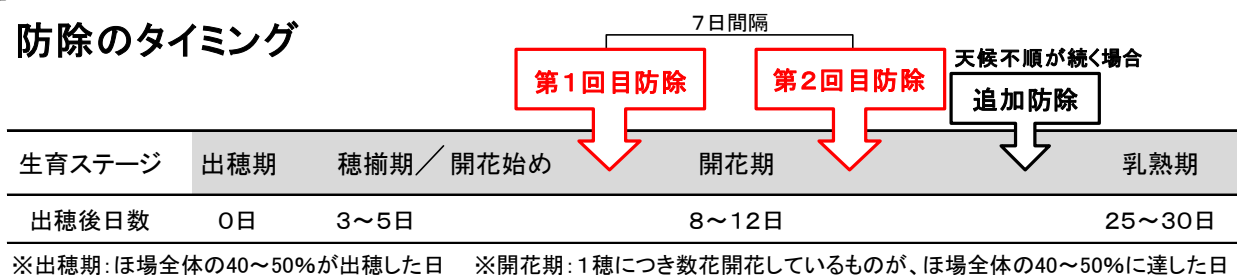
水田で除草剤や水面施用剤などの農薬を使用した時には、河川に流れ出ないように散布後7日間は落水・かけ流しをしない。その間の入水は水尻を止めたままで行う。

(2) 小 麦

【 赤かび病 】

赤かび病の病原菌は、人畜に中毒症状を起こす恐れがある「かび毒（デオキシニバレノールやニバレノール等）」を産生するため、農産物検査規格では、食用麦の赤かび粒の混入限度が0.0%（重量パーセントで0.04%以下）と非常に厳しくなっている。また、厚生労働省においてデオキシニバレノールの残留基準値「1.1ppm」が設定されているため、“予防防除の徹底”を図ることが重要である。

防除のタイミング



- ① 赤かび病菌は、開花から10日程度の間に感染しやすいため、「開花始め～開花期」に第1回目の防除を、その7日後に第2回目の防除を行う。
- ② 最初の発病部から二次伝染するので、第2回目の防除の後にも天候不順が続く場合は、追加防除を実施する。
- ③ 赤かび病の病原菌は数種類あり、紅色雪腐病の病原菌と同一のものがあるため、消雪後に紅色雪腐病が見られたほ場では防除を徹底する。
- ④ チオファネートメチル剤（F:1）は耐性菌が出やすいので連用しない。また、紅色雪腐病の発生したほ場ではチオファネートメチル剤は使用しない。

【 うどんこ病、赤さび病 】

- ① 赤かび病にも登録のある薬剤を選択し、効率的な防除を図る。
- ② チオファネートメチル剤は耐性菌が出やすいので連用しない。

系統別防除薬剤一覧

薬剤系統名（FRACコード）	薬 剤 名
DMI 剤（3）	シルバキュアフロアブル、トリフミン水和剤、ワークアップフロアブル
QoI 剤（11）	ストロビーフロアブル、アミスター20フロアブル（赤かび病に登録なし）
ベンゾイミダゾール系（1）	トップジンM水和剤

※ アミスター20フロアブルは、赤かび病のカビ毒汚染低減効果が劣る事例があるので、出穂後は使用しない。

（３）りんご

【 モニリア病 】

- ① 実腐れや株腐れはそのまま放置すると地表に自然に落下して越冬し、翌年の伝染源になるので、園内を見回り、見つけ次第摘み取って、土中深く（10cm以上）に埋めるなど必ず適切に処分する。

【 腐らん病 】

- ① 枝腐らんは、見つけ次第切り取り、適切に処分する。
② 胴腐らんは、再発病斑を含め見つけ次第、次のいずれかの処置を行う。なお、処置方法については、青森県産業技術センターのYoutube公式チャンネルに掲載している。

(<https://www.youtube.com/@aitcofficial/videos>)

ア トップジンMオイルペースト、フランカットスプレー又はバッチレートを使う場合は、薬剤ごとに適切な方法で処置を行う。

イ 泥巻きを行う場合は、水を加えて団子状にこねた泥を病斑部よりも5～6cm広めに、3～5cmの厚さに貼り付ける。さらにその上をビニール又はポリエチレンフィルムなどで被覆し、内部の泥の乾燥を防ぐようにして約1年間そのままにしておく。病斑部を軽く削り取ってから泥巻きを行うと一層効果的である。なお、火山灰土壌を使用する場合は、容積比で土が9に対してベントナイト（土壌改良資材の一種）1を加えてこねると粘着性が増し、泥巻き作業の効率が良くなる。泥を作るには、土とベントナイトをよく混ぜてから水を入れて練る。この際、ベントナイトは量が多すぎると樹皮が腐敗し、治ゆ効果も低下するので、加える量を誤らないようにする。

ウ 胴腐らんの発病が著しい樹は、伝染源になるので積極的に伐採する。

- ③ 摘果後の果柄感染による枝腐らんの発生が多い園地では、「6月中旬」にラビライト水和剤を選択する。



二次元コード1
：トップジンM
オイルペースト



二次元コード2
：バッチレート



二次元コード3
：泥巻き法

【 黒星病 】

- ① 園地の発生状況を丁寧に確認し、発病葉や発病果は見つけ次第摘み取り、土中に埋めるなど適切に処分する。
② 散布むらを生じないように適切な量を丁寧に散布する。散布予定日に降雨が予想される場合は事前散布に徹する。また、曇雨天が続く場合には晴れ間を見計らって散布する。

【 輪紋病 】

- ① いぼ皮病斑は軽く削り取ってトップジンMペーストを塗る。
② いぼ皮病斑が多発している園地では、6月中旬から7月末までの基準薬剤の中から有機銅剤（キノンドー顆粒水和剤、オキシンドー水和剤80）、オキシラン水和剤、ダイパワー水和剤、ベフラン液剤25のいずれかを選択すると、枝における新たな感染を抑制できる。

【 斑点落葉病 】

- ① 6月下旬から不要な徒長枝を剪去する。
② 高温・多湿で急増するので注意する。

【 クワコナカイガラムシ 】

- ① 6月下旬から7月中旬に、越冬世代成虫が大枝の切口や木の空洞部周辺に集まるのでブラシなどでつぶす。
② バンド巻きによる誘殺などで密度の低下を図る。バンドは越冬世代成虫の産卵前（6月下旬）に巻き付け、第1世代卵のふ化前（7月20日頃）に必ず除去する。

【 シンクイムシ類 】

- ① モモシンクイガ対策として「6月中旬」から毎回防除剤を散布する。また、もも、なし、すもも、マルメロなども発生源となるので、適切な管理を行う。
- ② ナシヒメシンクイの発生が多い園地では、毎回防除剤を散布する。また、うめ、あんず、もも、なし、すもも、おうとうなども発生源となるので、適切な管理を行い、芯折れは見つけ次第剪去して処分する。
- ③ 前年に被害がなく、周辺に放任園など発生源の見られない園地で、ピレスロイド剤（バイスロイドEW、サイハロン水和剤、アーデントフロアブル、イカズチWDG）を使用した場合は、次回の防除剤を省略できる。
- ④ 被害果は見つけ次第採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。

【 ハダニ類 】

- ① 薬剤の選択に当たっては、発生しているハダニの種類を確認する。
- ② ひこばえ（根ばや）と大枝から発出している徒長枝は早めに剪去する。
- ③ ハダニ類の防除剤（殺ダニ剤）は薬剤抵抗性が出やすいので、同一薬剤は年1回の使用とする。

参考表 りんごに使用する農薬の作用機構分類

<殺菌剤>

薬剤名	有効成分	FRAC コード	系統名
トップジンMオイルペースト	チオファネートメチル	1	
フランカッスプレー	ポリオキシシンD亜鉛塩	1 9	
バッチレート	有機銅	M 0 1	
ラビライト水和剤	チオファネートメチル	1	
	マンネブ	M 0 3	
トップジンMペースト	チオファネートメチル	1	
キノンドー顆粒水和剤	有機銅	M 0 1	有機銅剤
オキシンドー水和剤80	有機銅	M 0 1	
オキシラン水和剤	キャプタン	M 0 4	
	有機銅	M 0 1	
ダイパワー水和剤	キャプタン	M 0 4	
	イミノクタジンアルベシル酸塩	M 0 7	
ベフラン液剤25	イミノクタジン酢酸塩	M 0 7	

<殺虫剤>

薬剤名	有効成分	IRAC コード	系統名
バイスロイドEW	シフルトリン	3 A	ピレスロイド剤
サイハロン水和剤	シハロトリン	3 A	
アーデントフロアブル	アクリナトリン	3 A	
イカズチWDG	シベルメトリン	3 A	

注）FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン（旧農薬工業会）ホームページ（<https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>）を参照。

（４）特産果樹

○ ぶどう

【 灰色かび病 】

- ① 新梢の摘心や誘引を適切に行い、園地内の通風を良くする。ハウス栽培では室内の換気に努め、過湿にならないようにする。
- ② 発病葉、発病花穂、発病果及び発病枝はできるだけ早く取り除き土中に深く埋める。
- ③ 「キャンベル・アーリー」では「開花10日前頃」の散布後、低温が続いて次回の「開花直前」までの散布間隔が開きすぎると多発が懸念されるので、「開花見込みの1週間前頃」にピクシオDF2,000倍を特別散布する。例年発生の多い園地では、「開花直前」にゲッター水和剤又はフルーツセイバーを選択する。
- ④ 「スチューベン」及び「シャインマスカット」で発生の多い園地では、「開花直前」にゲッター水和剤を選択する。

【ベと病】

- ① 排水不良園では、排水溝を掘って、雨水が長く溜まらないようにする。
- ② 「スチューベン」で発生の多い園地では、「開花10日前頃」にアリエッティC水和剤、キノンドー水和剤40、チウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）のいずれか、「開花直前」にアリエッティC水和剤を選択し、「落花直後」にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍を使用する。
- ③ 「シャインマスカット」で発生の多い園地では、「開花直前」にアリエッティC水和剤を選択し、「落花直後」にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍を使用する。

【晩腐病】

- ① 発生の多い園地では、「落花直後」にポリベリン水和剤又はスイッチ顆粒水和剤を選択する。

【褐斑病】

- ① 「キャンベル・アーリー」で発生の多い園地では、「開花10日前頃」にオーソサイド水和剤80又はチウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）、「開花直前」にオーソサイド水和剤80又はフルーツセイバー、「落花直後」にポリベリン水和剤を選択する。ただし、「開花10日前頃」及び「開花直前」に灰色かび病対策でアリエッティC水和剤を散布すると、この時期の褐斑病対策の防除剤は必要ない。

○ おうとう

【灰星病】

- ① 実腐れは、見つけ次第摘み取って処分する。
- ② 「満開35日後頃」以降、多発が懸念される場合は「佐藤錦の収穫見込みの7日前頃」にインダーフロアブル5,000倍又はパスワード顆粒水和剤1,500倍を特別散布する。

【オウトウショウジョウバエ】

- ① 被害果や取り残し果実及び落下した果実は発生源となり、園内密度が高まるので、速やかに処分する。

【カメムシ類】

- ① 8月上旬まで断続的に成虫が飛来し葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
- ② 「満開35日後頃」に発生がみられた場合、テルスターフロアブルを選択する。
- ③ 「収穫前（佐藤錦）」に発生がみられた場合、オウトウショウジョウバエ対策でスカウトフロアブルを使用すると、この時期のカメムシ類対策の防除剤は必要ない。
- ④ 「収穫前（晩生種）」に発生がみられた場合、テルスターフロアブルを選択する。ただし、この時期にオウトウショウジョウバエ対策でスカウトフロアブルを使用すると、この時期のカメムシ類対策の防除剤は必要ない。

○ もも

【せん孔細菌病】

- ① 薬剤散布と耕種の防除を組み合わせた総合的防除を徹底する。なお、風を強く受ける地帯で多発するので、防風対策は必ず行う。
- ② 春型枝病斑及び夏型枝病斑は重要な伝染源になるので、速やかに切除する。
- ③ 前年果実被害が多かった園地では、果実への感染を防ぐため有袋栽培とする。仕上げ摘果をできるだけ早く終わらせ、速やかに袋かけを行う。
- ④ 「落花20日後頃」にマイコシールド、スターナ水和剤、I C ジンク水和剤、クプロシールドのいずれかを使用する。
- ⑤ 「落花30日後頃」～「落花40日後頃」にマイコシールド、スターナ水和剤、I C ジンク水和剤のいずれかを1～2回使用する。
- ⑥ クプロシールドは葉に葉害を生じるおそれがあるので、葉害軽減のためクレフノンを必ず加用する。散布後に大雨があるとクレフノンが流されるので注意する。
- ⑦ マイコシールドとスターナ水和剤は薬剤耐性発達の懸念があるので、それぞれの薬剤を連続使用しない。

【カメムシ類】

- ① 8月上旬まで断続的に成虫が飛来し葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
- ② 発生が見られる園地では、「落花30日後頃」にスミチオン水和剤40、7月上旬にイカズチWDGを選択する。

○ 西洋なし

【 輪紋病 】

- ① 6～7月の幼果期は最も感染しやすいので、10日間隔の薬剤散布を守る。散布予定日に降雨が予想される場合には、事前散布する。

【 カメムシ類 】

- ① 8月上旬まで断続的に成虫が飛来し葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
② 7月上旬までに発生がみられた場合は、イカズチWDG1,500倍を特別散布する。

参考表 特産果樹に使用する農薬の作用機構分類
<殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
ピクシオDF	フェンピラザミン	1 7	
ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ	1 0	
	チオファネートメチル	1	
フルーツセイバー	ベンチオピオラド	7	
アリエッティC水和剤	キャプタン	M 0 4	
	ホセチル	P 0 7	
キノンドー水和剤40	有機銅	M 0 1	
チオノックフロアブル	チウラム	M 0 3	チウラム剤
トレノックスフロアブル	チウラム	M 0 3	
ランマンフロアブル	シアゾファミド	2 1	
ライメイフロアブル	アミスルプロム	2 1	
ポリバリン水和剤	イミノクタジン酢酸塩	M 0 7	
	ポリオキシシン複合体	1 9	
スイッチ顆粒水和剤	シプロジニル	9	
	フルジオキシニル	1 2	
オーソサイド水和剤80	キャプタン	M 0 4	
インダーフロアブル	フェンブコナゾール	3	DMI 剤
パスワード顆粒水和剤	フェンヘキサミド	1 7	
マイコシールド	オキシテトラサイクリン	4 1	抗生物質剤
スターナ水和剤	オキシリニック酸	3 1	
ICジンク水和剤	酸化亜鉛	未設定	
クプロシールド	塩基性硫酸銅	M 0 1	

<殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
テルスターフロアブル	ビフェントリン	3 A	ピレスロイド剤
スカウトフロアブル	トラロメトリン	3 A	
スミチオン水和剤40	ME P	1 B	有機リン剤
イカズチWDG	シペルメトリン	3 A	ピレスロイド剤

注) FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロープライフジャパン(旧農薬工業会)ホームページ(<https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>)を参照。

(5) 野 菜

○ じゃがいも

【 疫病 】

- ① 平均気温15℃以上で、降雨日が2～3日続くと感染し始め、20℃前後で曇天多湿な天候が続く場合に蔓延しやすい。

- ② 着蕾期～開花期頃から7～10日間隔での予防防除を徹底する。特に、濃霧や雨の日が続くような場合には、散布間隔が空かないように降雨の合間をぬって薬剤散布を行う。
- ③ 発生が認められた場合には、蔓延防止のため、5～7日間隔での薬剤散布を徹底する。

○ にんにく

【春腐病】

- ① 降雨や曇天の日が続く場合に発生が増加し、生育が旺盛なほ場で多発しやすい。
- ② 多発してからの薬剤散布では防除効果が期待できないことから予防散布を基本とする。天気予報により降雨が続くと予想される場合、降雨前に薬剤を散布すると効果的である。
- ③ 発生の見られたほ場では、抗生物質剤、オキシロニック酸剤及びそれら混合剤を中心に7日おきを目安に散布して蔓延防止を図る。なお、耐性菌防止のため、同一薬剤の連用はしない。
- ④ 萎凋症状を示すなど腐敗が進行している株が認められた場合は、見つけ次第抜き取り処分する。伝染源の除去に努めることで、周囲への感染を防止する。

(参考) 抗生物質剤及びオキシロニック酸の混合剤

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
バリダマイシン液剤 5	バリダマイシン	U18	抗生物質
アグリマイシン-100	ストレプトマイシン硫酸塩	25	抗生物質
	オキシテトラサイクリン	41	抗生物質
カスミンボルドー	カスガマイシン-塩酸塩	24	抗生物質
	塩基性塩化銅	M01	無機銅
カップーシン水和剤	カスガマイシン-塩酸塩	24	抗生物質
	塩基性塩化銅	M01	無機銅
ナレート水和剤	オキシロニック酸	31	カルボン酸
	有機銅	M01	有機銅
カセット水和剤	オキシロニック酸	31	カルボン酸
	カスガマイシン-塩酸塩	24	抗生物質

【さび病】

- ① 初発時期が早く、気温が高く推移すると多発する傾向がある。
- ② 下表に示した防除薬剤の効果の持続期間（散布間隔）を参考に防除を実施する。発生が多い場合は効果持続期間より散布間隔を短くする。
- ③ 薬剤の防除効果を安定的に発揮させるためには、散布量を十分確保し、下葉までまんべんなく薬液がかかるように散布することが重要である。

《ニンニクさび病防除薬剤の散布間隔の目安》

薬剤名	有効成分	FRAC コード	系統名	さび病蔓延期における効果の持続期間		
				21日 程度	10～14日 程度	7～10日 程度
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	11	QoI 剤	○		
アミスターオブティフロアブル	アゾキシストロビン	11	QoI 剤	○		
	TPN	M05	クロロニトリル剤			
シグナムWDG	ピラクロストロビン	11	QoI 剤	○		
	ボスカリド	7	SDHI 剤			
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	3	DMI 剤	○		
ラリー乳剤	ミクロブタニル	3	DMI 剤		○	
ストロビーフロアブル	クレソキシムメチル	11	QoI 剤		○ (10日程度)	
テーク水和剤	シメコナゾール	3	DMI 剤			○
	マンゼブ	M03	ジチオカーバメイト剤			

【葉枯病】

- ① 発生適温は気温20～25℃で、湿潤な時に発生しやすい。5月下旬頃から発生し始め、草勢が低下したほ場では発生が増加しやすい。

② ほ場をよく見回り、発生初期から10日おき位に薬剤を散布する。

○ キャベツ・ブロッコリー

【コナガ・ヨトウガ】

- ① 生育初期に多発すると芯葉部が加害され、被害が大きくなるので定植時の薬剤防除を徹底する。
- ② 生育期後半になると葉が肥大して葉裏に葉液が付着しづらくなり、防除効果が低下する。生育期中盤の防除を徹底して発生密度を低下させ、生育期終盤の出荷部位への加害を防止する。
- ③ 殺虫剤に対する抵抗性が発現しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。コナガでは、ジアミド剤（IRACコード28）の抵抗性個体群が確認されているので、防除効果が低い場合は別系統の薬剤を使用する。

★農薬を使用する際には必ず最新の農薬登録情報を確認してください★

農林水産省「農薬情報」 https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/

農林水産省「農薬登録情報提供システム」 <https://pesticide.maff.go.jp/>

～青森県農薬危害防止運動展開中！（6月1日～8月31日）～

○農作物や使用者の安全のため、農薬は使用基準を守って使用しよう！

○農薬散布の際は、周辺に農薬を飛散させないようにしよう！

☆農薬散布時は農薬の飛散防止対策をしてください☆

学校、保育所、病院、公園等の公共施設内の植物、街路樹並びに住宅地に近接する農地（市民農園や家庭菜園を含む）及び森林等において、農薬の飛散を原因とする住民や子ども等の健康被害が生じないように、飛散防止対策を徹底しましょう。農薬散布に当たっては、事前に周辺住民に対して、農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類及び農薬使用者の連絡先等を幅広く周知するとともに、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合には、十分配慮しましょう。

☆クロルピクリン剤の安全使用について☆

本県では、ながいもやごぼう等の根菜類の作付けが多く、土壌病害を防除するため、クロルピクリンが使用されていますが、その使用に当たっては次の事項を遵守しましょう。

＜使用上の注意＞

- 処理作業は、気温・地温の低い午前中か夕方に行う。
- 使用時は、防護マスクや防護メガネ等を着用する。
- 揮散したガスは低地にたまりやすいため、農地近郊の低位置に人家や畜舎等がある場合は使用しない。
- 降雨等により地下水や河川等に流入するおそれがある場合は使用しない。
- 人家や畜舎等に近接する農地での使用を避けるとともに、人家や畜舎等の近郊では、それらが風下になる場合は作業を一時中断する。
- 使用後は、直ちにポリエチレンフィルム等（厚さ0.03mm以上の厚めのもの、難透過性のもの）で被覆するなど、揮散防止のために必要な措置を講じる。
- 使用済みの空き缶等は、周囲に影響を及ぼさないよう適切に処分する。
- トラック等で薬剤を運搬する場合は、薬剤が脱落しないよう確実に固定して積載する。
- 施錠可能な冷暗所に保管する。

《当情報に関する問い合わせ先》

青森県病害虫防除所 TEL:017-729-1717 FAX:017-729-1900
〒030-0113 青森市第二問屋町4-11-6
E-mail: byogaichu@pref.aomori.lg.jp

※当情報は、青森県農業・就農情報サイト「農ナビ青森」
(<https://www.nounavi-aomori.jp/>) に掲載しています。